

## かながわコミュニティカレッジ講座 修了生インタビュー

### 「聞き書きボランティア養成講座」

講座実施団体：聞き書きの樹\*1

「お年寄りが亡くなると、地域の図書館が1つ消える」とも言われています。

「聞き書きボランティア」とは、高齢者の話を聞きその人の語り口で書き、1冊の本にして差し上げる活動です。聞き手は語り手の経験、知識を共有して、知らなかったことを学べるとともに後世に伝える架け橋となります。出来上がった冊子は世界にたった1冊の本となります。そして語り手は思い出を語ることで、自身の人生を振り返り、今の自分を見つめ直すきっかけとなります。

講座の修了生で実際に活動を始めた

高橋 喜宣(きよし)さん(2016年度講座修了、川崎市在住)に話を伺いました。



(高橋 喜宣さん)

### ◆受講の動機

定年退職する前から、かわさき市民活動センターの市民記者の活動に携わり、川崎市内の色々なボランティア団体を取材していました。この講座との出会いは、市民活動センターに置いてあったチラシが目にとまったことでした。10年間続けた市民記者を卒業することになっていたため、お年寄りから全く知らない話を聞いて文章にする活動は自分に合うのではないかと、また、冊子に残すことで相手にも喜んでもらえるのではと思い、受講しました。

### ◆講座の様子について

受講生は23名で、ほとんどがシニア世代でした。第1回目のオリエンテーションでは聞き書きの意義を理解しました。2回目からは演習です。講師と福祉活動をされている方との聞き書きのやり取りを聞き、私たち受講者も自分のレコーダーに録って書き起こし、作品にまとめるのです。テープ起こしのやり方、原稿の小見出しの付け方なども習いました。

作品を提出後、最終回で講師から感想やアドバイスを受けました。自分の作品

に対する講師の手書きの感想が嬉しかったですね。このとき、自分にぴったり合った活動だと確信が持てました。面白かったのが、同じ内容のテープ起こしでも、ワークショップで発表すると受講生一人一人の作品が違う出来上がりになるのです。聞き手の捉え方が皆違うのですね。

### ◆聞き書き活動を始める

講座の終了後は、各自の住まいの地域ごとに分かれてグループを作りました。武蔵小杉に住む私を含め、地域別グループで一緒になった4人で「こすぎ聞き書き隊」を立ち上げました。私とその隊長に仲間から推薦されたので、2ヶ月に1度集まって勉強会の計画なども立てました。

自分の初の聞き書きの相手は、知人に紹介してもらったデイケアホーム利用者の95歳の女性でした。初めてということもあるでしょうが、忘れがたい、素晴らしい方でした。完成した冊子をご本人に渡すときに、ホームの利用者さんの前で朗読して差し上げました。施設の方も「昔話は利用者さんの仲間意識を高めます」と喜んでくれました。これまでに3人の方の聞き書きをして冊子をお渡ししました。



(完成した作品を手渡す様子)

### ◆活動を振り返ってみて

聞き書きとは、相手が話したいことを書くのが基本です。お話を聞くのはおよそ1時間、その後はホームで一緒にランチをしながら、よもやま話をするというスタイルで2、3回お会いしました。そのうち、気心も知れて親しくなると、深い話がどんどん出てくるから不思議でした。人に話したくないことは誰にもあるはずで、辛い思い出を話すのは大変なことです。回を重ねたり、一緒にデイサービスで食事をしたりすると、苦しかった時の思い出がポツリとよみがえることがあります。

### ◆講座を受ける方へのメッセージ

聞き書きは、人のためだけにやろうと思ったら長続きしません。自分と相手とが双方、うれしく満足に思うことが大切です。そして一人ではできません。講座で知り合った仲間の応援があったからこそ、作品が出来上がりました。「こすぎ聞き書き隊」のメンバーが、私の文章の添削をしてくれました。アドバイスはもちろん、戦後の資料となる写真まで送ってくれて、冊子に挿入できたのは本当にありがたかったです。

平成31年1月9日取材

町田香子（市民記者）

\*1 2016年度に開講した講座では、講座実施団体名を“聞き書きのわ”で実施しました。本年度（2018年度）は、団体名を聞き書きの樹として、講座を開催しました。